

コオキナガイ *Laternula impura* (Pilsbry)

【選定理由】

2002年版愛知県レッドデータブックでは未記載種のオキナガイ属の一種(本書でオヤイツオキナガイと和名新称した)がコオキナガイと誤同定され掲載されていたが、2009年版愛知県レッドデータブックでは、コオキナガイは分布域から考えて生息していた可能性は高いが、愛知県内から確実な生息記録や標本が確認できないとして、レッドリストから削除され、オキナガイ属の一種のみがリストに掲載された。2011年に実施した標本調査の結果、愛知県田原市汐川干潟で1965年に河辺訓受氏によって採集されたコオキナガイと確実に同定される1個体の標本(右図)が見いだされた。これにより愛知県にも本種が生息していたことが明らかになった(木村, 2012)。

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。本県でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。現在本種は死殻も全く採集されず、絶滅した可能性も高い。

【形態】

殻長約40mmで、殻は長楕円形で膨らみはやや強い。殻は白色で非常に薄く脆い。ソトオリガイ *Exolaternula liautaudi* (Mittre) と近似するが、殻の丸みが強く、後端が細まり尖る点で区別できる。また本種はソトオリガイでは認められる両殻をつなぐ殻帯(殻の内側の靱帯受に接している)を欠く。



田原市汐川干潟, 1965年, 河辺訓受採集

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、現在では生息は確認されず、死殻でさえ全く採集されない。県内の個体群は絶滅した可能性が高い。

【世界及び国内の分布】

房総半島～南西諸島、中国大陸に分布する(木村, 2012)。三浦半島(葉山しおさい博物館, 2001)では絶滅(相模湾の個体群が消滅)が報告された。南西諸島ではかつては健全な個体群が確認されていたが、護岸工事や埋立などで個体群ごと消失した例も多く、現在、佐敷干潟においてわずかな個体群が残存する他は壊滅的状況となっている(久保, 2017)。三重県英虞湾奥部の狭い範囲で少数の生きた個体が採集され、現在の分布東限と考えられる。瀬戸内海西部、九州西岸でも生息が確認されているが、生息地、個体数とも非常に少ない(木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

唯一標本の採集された汐川干潟で毎年モニタリングが行われているが、死殻も見られず生息が確認できない。上述したような干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.
木村昭一, 2012. コオキナガイ, p.168. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野市.
久保弘文, 2017. コオキナガイ, p.477. in: 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物第3版(動物編) - レッドデータおきなわ -, 712pp. 沖縄県,

【関連文献】

- 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版(南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(木村昭一)